

社会感情的能力の教育・評価に関わるデザイン

実施責任者 野崎優樹 教育学研究科 教育科学専攻 特定講師
楠見孝 教育学研究科 教育科学専攻 教授
北雄介 デザイン学ユニット 特定講師

参加者 赤城賀奈子 経営管理教育部 経営管理専攻 M1
安達真永 工学研究科 機械理工学専攻 M1
池田潮良 教育学研究科 教育科学専攻 M1
王隆基 教育学研究科 教育科学専攻 M1
西口美穂 教育学研究科 教育科学専攻 M1
橋爪雅人 情報学研究科 社会情報学専攻 M1
李瑞明 情報学研究科 知能情報学専攻 M2

問題

社会感情的能力

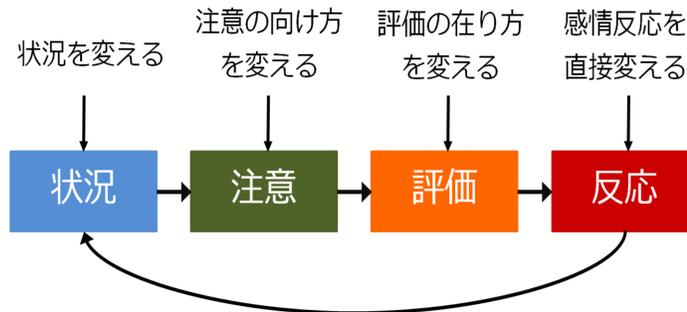
- 他者と関わり合いながら社会で活躍する上で重要な能力の総称。感情知性（EQ）とも呼ばれる。
- 共感力・自己制御力・ストレス対処力など

測定の難しさ

- 通常の知能テストでは、1つの問題に1つの正解があるが、感情知性に関しては、ある問題に対して1つの正解を定めることが難しい。
 - 現状、主に用いられている手法
 - 自己報告尺度・・・回答バイアスの問題
 - パフォーマンステスト・・・正解を決めることが困難
- 個人のプロフィールをフィードバックする強制選択式のテストであればこれらの問題を解決できる

感情調整方略

- 人がどのように感情を調整するか — EQの構成要素の1つ



本研究の目的：

EQの構成要素である感情調整方略に着目し、既存のEQ測定方法が持っていた問題を解決し、より様々な場面に適応できるような尺度の開発を目指す。

方法

尺度の作成

日常生活において不都合な状況に直面するなどの理由でネガティブな感情を感じた際にどのような対応方法を用いるかについて、感情調整方略4（状況, 注意, 評価, 反応）×方略対象2（自己, 他者）の64項目8因子の尺度を作成した。

調査方法・対象者

社会人538名（うち女性169名）（ $M_{age} = 48.9, SD_{age} = 10.17$ ）に、職種や婚姻歴などとともに、リッカート法と強制選択法の両方法で回答させた。

質問項目例

状況×他者

問題解決のためのアドバイスを誰かに求める

注意×自己

1人で息抜きになるようなことをする

評価×自己

その経験から得るものがあると考えている

反応×他者

誰かにその状況に関する不満を漏らす

結果

探索的因子分析・確認的因子分析を行った

→探索的因子分析では7因子となり、状況×他者と評価×他者が一つの因子にまとまってしまった（CFI = .874, PCFI = .837, RMSEA = .059）
しかし、それ以外の因子は想定通りにまとまった

→また、8因子でのモデルでも適合度に大きな変化はなかったため、8因子でも分析可能だと判断（CFI = .881, PCFI = .841, RMSEA = .058）

では、どのような人が、どのような方略を使うのか？

例えば、EQの高い人は、（強制選択、リッカート）

- **状況×自己をよく用いる** ($r_s = .226, .284$)
- **注意×自己は使わない** ($r_s = -.334, -.164$)
- **反応×自己は使わない** ($r_s = -.250, -.159$)

という傾向を持っている

例えば、男女を比較したとき、女性の方が

- **状況×他者・注意×自己・注意×他者**
- **評価×他者・反応×他者をよく使う**

→女性の方がより「他者」によって情動調整を行おうとする傾向にある

例えば、年齢が高くなるほど**注意・反応方略はあまり使われなくなる**（例：強制選択注意・自己 $r = -.258$ ）

考察

- 因子分析ではほぼ想定していた因子でまとまった
- 作成した尺度はそれぞれの情動調整方略を区別できる
- 自分がどのような情動調整方略を用いがちなのかを得点化・フィードバックを行うことができる

実社会での適用可能性

- 就活・婚活等でのマッチングに利用（使う方略が似ていると相性がよいかも？）
- 人材評価における評価方法のひとつとして利用
- トレーニングに先立つ自分の情動調整方略の客観化